

P2-061

歯科的管理を行った社会的ひきこもり患児の1例

澤本 圭南子、清水 武彦

日本大学 松戸歯学部

【目的】

日本における社会的ひきこもり者は軽度の者も含めると、その数は現在約70万人以上と推計されている¹⁾。小児歯科臨床において「ひきこもり」という状態を呈する患児に出会うことは珍しく、その報告は極めて少ない。今回、我々は歯科受診が契機となりひきこもりの改善が認められた1例について報告する。

【症例】

患児：初診時年齢15歳（男児）

主訴：齶蝕の精査と加療

既往歴：中学入学時頃、友人から下顎前突や肌荒れ等について言われ友人関係が悪化し不登校、ひきこもりとなった。自宅にひきこもるようになってからは生活が昼夜逆転となり、生活の乱れからブラッシングすることもほとんどなくなった。ひきこもりは1年ほど続き、中学2年生頃から週1日程度ではあるが相談室に通うようになった。中学3年生頃から高校進学に向け口腔内を改善したいと本人の希望があり来院した。

家族歴：特記事項なし。

現症：

全身所見：精神科への受診、全身疾患の既往はなく、統合失調症や広汎性発達障害はない。その他特記事項なし。

口腔内所見：下顎前突であり、上顎右側中切歯から左側切歯は歯冠崩壊しており、その他多数の広汎性齶蝕を認めた。全顎的にプラークが多量に付着しており、歯肉発赤および腫脹が認められた。

治療経過：口腔内のプライマリーケアや前歯部の審美性を改善したことで、治療途中から学校の相談室への通学が半日ではあるが週1日から毎日へと変化した。外出時必ず付けていたマスクの使用頻度も減り、笑顔が増えた。今後は口腔清掃指導を行いつつ、下顎前突に対する歯科矯正を行う予定である。

【考察】ひきこもり者の約40%が10代のうちにひきこもり状態になっている¹⁾。また、小松崎ら²⁾によると80%以上のひきこもり者が歯科からの支援を必要としており、さらに70%が歯科受診によってひきこもりが改善する可能性があるとしている。今回報告した症例も、歯科受診により症状の改善を契機としてひきこもりが改善していると考えられる。ひきこもりは、自殺増加や児童虐待とともに、近年の精神衛生三大課題と称されていることから、今後はひきこもり児に対して歯科保健医療面からの支援の可能性についてさらに検討していきたい。

【文献】1) 内閣府政策統括官：若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）報告書、内閣府、東京、46：2-12, 2010. 2) 小松崎 明, 他：社会的ひきこもり者の歯科保健医療に関する検討、口腔衛生会誌, 63：21-27, 2013.

P2-062

中・高校生の性格と歯肉炎との関連性について

立花 太陽¹⁾、江田 康輔¹⁾、池田 英史¹⁾、佐野 哲文¹⁾、荻原 孝¹⁾、佐野 正之²⁾、渡部 茂¹⁾¹⁾明海大学 歯学部 形態機能育成講座 口腔小児科学分野、²⁾あすなろ小児歯科医院

【目的】

中・高校生の歯肉炎に対する最も有効な治療法は、患児に対してのブラッシング指導であり、家庭での実践が鍵となる。日常臨床で指導しても改善されにくい症例に遭遇する機会も多い。この原因に関しては、演者らは、従来の指導法が炎症の病態にのみ着目し、指導を受ける側の患児の気持ちを全く無視していたのではないかと考えた。そこで今回、患児の性格と口腔衛生習慣との間にどのような関連性が存在するかを確認することを目的として、研究に着手した。

【対象と方法】

対象は、富山市のA小児歯科医院に定期管理を目的として通院する健康な中・高校生男子238名と女子244名合計482名で、対象者の年齢は13.9歳であった。調査は、口腔内診査と生活習慣に関するアンケートとで行った。なお、生活習慣に関しては、(1) 歯磨き習慣 (2) 1日の歯磨き回数 (3) 歯ブラシの交換時期 (4) 歯ブラシの持ち歩き (5) フロスの使用の有無 (6) 歯科医院での歯磨き指導の有無の計6項目について事前に文章で説明し、患児・保護者両者ともに了解を得たのちアンケート紙記入法にて行った。また患児の性格分析は日本交流分析協会の思春期用エゴグラムSHE60(以下質問紙)を用いて分析した。これらの結果に対しての統計学的検討は、統計解析ソフトSPSSを用いて一元配置分散分析にて分析した。

【結果・考察】

歯肉炎の有所見者と無所見者それぞれについて、口腔衛生習慣6項目と性格との関わりについて検討した結果、(1) 歯磨き習慣 (2) 1日の歯磨き回数 (3) 歯ブラシの交換時期の3項目で、統計学的に有意差を認めた。これらのうち、歯肉炎の予防に貢献すると思われる(1) 毎日磨く (2) 1日3回以上磨く (3) 1~2ヵ月ごとに歯ブラシを交換するの3項目について、性格との関連の検討を行ったところ、客観的に冷静な性格を示すAが高い値である患児、また、大らかな性格を示すNPが高い値の患児は良好な口腔衛生習慣を身につけており、歯肉炎にも罹患していなかった。一方、規律を重視する性格でCP値の高い患児は、事前の想定に反し実際はあまり良好ではない口腔衛生習慣であった。これらの結果から、一応は表面的に指導に従っているようでも、性格上、家庭で確実にブラッシングしている患児と、そうでない患児の存在が示唆された。今後、こうした患児の個々の性格に配慮した指導がもっと必要であると考えられる。